

ウィーン・モダン クリムト・シーレ 世紀末への道

国立新美術館 2019. 04. 24～08. 05 国立国際美術館（大阪）2019. 08. 27～12. 08

「グスタフ・クリフト」(1862～1918)は、美術史的には象徴派・アールヌーボ時代、文化史的には“良き時代”で、ウィーンの街には環状道路が整備され、周辺には壮麗な建築物が立ち並んで、“世界都市”に相応しい威容を備えていた。さらに、ワルツ王「ヨハン・シトラウス」のワルツやオペレッタに浮かれることで、ウィーンのカフェ文化が全盛期を迎えた誠に良き時代であった。画伯「クリムト」は、まさにウィーンのベル・エポックに生まれ育った生粋のウィーン子で、社交界の貴婦人を描く一方、危険な官能的に満ちた寓意的な作品を残しながら、工芸的な装飾美においても他の追従を許さないもので、ウィーン的な芸術があれば“彼に始まり彼に終わる”とされている。



《エミーリエ・フレーゲの肖像》 1902年 油彩/カンヴァス (左)

モデルは、白いドレスをまとふことの多い女性肖像像とは異なり、背景を含めて全体に青と緑のクールな色調が目立つ作品で、モデルのドレスはファッションにおけるリフォーム運動、つまり女性を締め付けているコルセットからの解放と、より動きやすいデザインを提唱した運動を反映している。



《パラス・アテナ》 1898年 油彩/カンヴァス (右)

アテナは、ギリシャ・アテネの守護神ゼウスの頭から武装した姿で、戦いの雄叫びをあげながら飛び出てきたという女神で、この作品については、“処女を意味する”とも、“武器を振りかざす人を意味する”とも言われている。この絵画には、分離派の新しい芸術の守護神として“勇猛なアテナを祀るといった意味合い”が託されていることは明らかであるとされている。つまり、古代アテネの守護神は、ウィーンの新しい芸術の守護神ともなる。